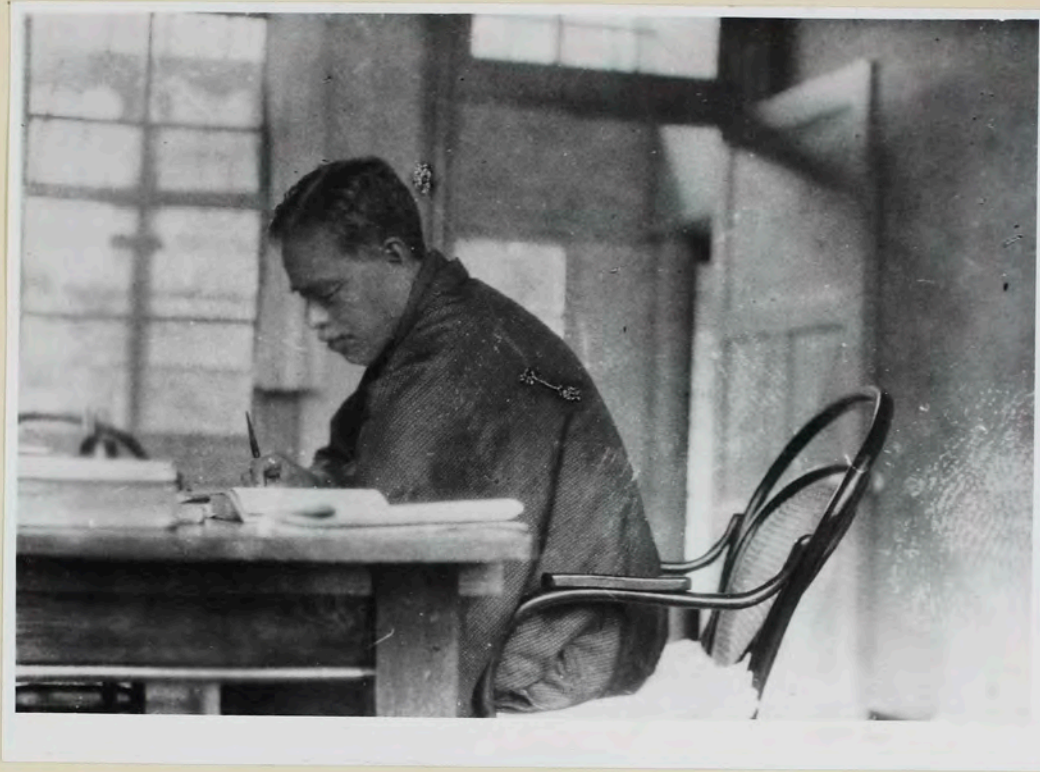


1929年(昭和四年) 八月廿五日
至 九月十六日

星野温泉山荘内書齋に於ける内村先生

星野温泉は、先生が大正十一年八月以來夏期幾度か休養せられし所であるが、今回は最後の事となった。當時私は柏木なる内村邸の留守番を仰せ付けて日夜緊張してその重任を守つて居た。



適に先生の目下御苦心中の一つの問題が解決の曙光現われ來つたので、一刻も早く先生に報せんと、九月六日獨り星野山荘に先生御夫妻を訪ねて具さにその要旨を傳えた。先生の喜悅満足は一と通りでなかつた。早速私は廊下りながら別館(明治の初年グラント將軍來朝の邸、その宿泊所として仙台的新築せる洋館)へ入り受けしもの(に)導かれ大方卓に先生と對坐した。先生は世界地圖を繙き、ロマ法王のバチカンの現狀を歎かれ、又柏木の集會の實狀をいためられた。次に窓外の視線を轉じ、緑の森、秋草の美を賞し、野鳥の歌と小川の水音に耳を傾けて自然界の壯嚴と調和を私に鋭敏なる注意を促された。時將に正午。勝手口より傳わり來る静子夫人の聲に應じ、パンの晝食と共にすそを許された。

時の迫るに及んで私は辭去つた。時、沓掛駅頭まで徒歩態で見送られ先生の懇ろなる好意を感謝しつゝ、上野行列車に乗り午後一時先生に別れを告げて歸途につき、確率シテは祈の間に過ぎた。